〈随想〉”居酒屋孔乙己”のことなど

木口, 堅太郎 / キグチ, ケンタロウ

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

64

(開始ページ / Start Page)

105

(終了ページ / End Page)

107

(発行年 / Year)

2001-07-14

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020179>

“居酒屋孔乙己”のことなど

木口 堅太郎

中国往還を十年余も続けていると、そこに浮かんでくる思い出は、あるものは鮮明に、また稀薄に脳裏に描かれるものらしい。そのどちらともつかない、濃さ淡くが綾をなしていつか記憶の壁に育っていることがあるものだ。

私は東京と北京の往還に終始したのだから北京と東京にそれぞれ一軒、ここが我が“居酒屋孔乙己”と一人ぎめしている憩いの場をもつようになった。

手元に魯迅の『呐喊』がある。一九七六年十月新華書店発行の、活字は簡化字、文字が横書きに印刷された装訂の粗末な一冊。北京の裏街のとある古書店で求めた。目次をめくった見開きの左面に〈本書注釋者・中国人民解放軍51101部隊理論組〉とあり右面には魯迅が自らデザインした初版の『呐喊』原出版封面が粗末な本には不似合いな原色刷りで収まっている。文化大革命が終息を見て四ヶ月たった一九七六年十月発行というのも興味を惹いた。一九八八年の冬、二月の初旬だった。奮発して売値の倍の一元を払って求めたのだった。

その日から七年経った一九九五年の夏、北京の朋友黄君の案内ではじめて“孔乙己酒家”で飲んだのである。

「孔乙己」は

魯鎮的酒店的格局、是和別處不同的、都是當街一個曲尺形的大櫃台、櫃里面預備着熱水、可以隨時溫酒。做工的人……

魯鎮の居酒屋の模様は、他の処とは違つてゐた。みな表通りに向かつて曲尺形の大きなスタンドがあつて、スタンドの内側には熱い湯が用意されてゐて、いつでも酒の燗をつけられるやうになつてゐた。労働する人々が……（岩波文庫『魯迅選集』佐藤春夫 増田涉訳・一九三五年初版・「孔乙己」の訳は増田氏）ではじまる。

孔乙己が飲みに入った魯鎮の咸亨酒店は、魯迅の故家の向かいにあつた文字通りの酒店がモデルで、客が茴香豆や乾筍の塩煮を肴に立飲みできる、日本にもある酒店が兼業の立飲み酒場だつたらしいが、それはともかく、「背がおそろしく高い、よく生傷の痕のある青白い顔の孔乙己がただひとり」長衣を着てあらわれ、カウンター（増田さんはスタンドと訳しているが）の前に立ち「黄酒を）二杯温めてくれ、それから茴香豆を一皿もらおう」というのだが、北京の“孔乙己酒屋”には紹興から取り寄せた本場ものの黄酒があり、茴香豆があつた。孔乙己が注文できなかつた「一文、奮発すると一皿の乾筍の塩煮も食べられた」それもある。不満なのは曲尺形大櫃台、いま流にいうとL字型のカウンターがなかつたことだが、茴香豆を肴に黄酒が飲めることが無性に嬉しかった。私の飲みっぷりは派手で気合いもよかつたようだ。黄君は「ムーコー（木口）さんは魯

迅がすきなんです。ホテルの部屋を訪ねると、いつもベッドの上か、テーブルに「呐喊」と「魯迅選集」があるからね」といった。私は饒舌だった。黄酒を飲んで舌が滑らかになっていた。

「魯迅が死んだのは一九三六年の十月。その一年前の七月、日本の正宗白鳥という作家が『モラエスと魯迅』という、千三百字程の評論を書いているんです。私が赤ん坊のころ。読んだのは一九七〇年代に入っただが、繰り返し読んだ。白鳥はモラエスとハーンのように異国に安んじて身を置いて文芸の夢に耽り得られるのは幸せ。彼らと比べ魯迅は不幸だといひ、『孔子論評』に言及し、千餘年来孔子崇拜を続けて来た日本人の眼には、所論が中正を缺いているらしく思われながら一面真穿っている感じは如何ともし難いと。また近刊の『魯迅選集』で「孔乙己」や「阿Q正伝」を読み、支那の現実を深刻に、巧みに描写していると評価しているのだが、『而已集』の中の一文——青年を圧迫し殺戮するのは大概老人。この種の老人が追々死んでしまえば……だが、そうではない。青年を殺戮するものは、どうやら青年のようだ、を引いて含蓄の多い言葉といい、地上の現実には、愚蒙から賢明に急転することはあるまい。文学者も超然として自分だけの夢に耽っていられば幸いと結んだ。言外に魯迅は死を賭して生きた文学者だと喝破したと、私は読んだのだ。」

黄君は一言「ありがとう。大魯迅先生に乾杯」といった。その夜「孔乙己酒家」は、「居酒屋孔乙己」に急転したのである。以来「去」孔乙己行こう孔乙己へ」が黄君と私の挨拶になっ

た。二人でよく飲んだ。黄君は「我がすきなのは『范愛農』だ。生きている魯迅を目の当たりにしているような、それがいいんだ」と、縷々と魯迅を語った。『魯迅批判』を書いた李長之の文化大革命下での痛ましい日々を話してくれたこともあった。

東京の「居酒屋孔乙己」はというと、飲みものは日本酒とビール。黄酒は無く、茴香豆も乾筍の塩煮もないが北京の「居酒屋孔乙己」にない大ものがある。それは曲尺形の大きい櫃大。しかも家構えがいい。門扉があつて一、二歩のところが格子戸の玄関。戦災を免れたらしい古色蒼然たる二階建ての下舞屋なのである。『范愛農』にでてくる魯迅が暮した本郷の下宿屋がさもありなんと彷彿させる、そんな風景。現実には開店が夕方の五時、遅れても二分といったところ。格子戸をあけ、門扉を内側に引つ張つて定着させたお女将さんが門柱を背に半身の姿勢で「いらっしゃいませ。お二人さん、カウンターへどうぞ」「四人さん、ではお座敷の方にどうぞ」といった具合に案内する。

昨年の正月が過ぎて間もなくであった。夕方の五時はもう街灯がともり夜の街に変容する。蕎麦通で世に知られるEさんのお供で一番乗り。席は曲尺形の長いほうのカウンターの奥まつた、内側に爛をつける湯が用意されているその真ん前。Eさんは「特等席だよ」とにつこり。私は瞬間「孔乙己」の書き出しの一節を憶い描いてEさんへの返事はそぞろ。内心「北京の孔乙己酒家」にも増してここはいい、本物だ——何が本物なのか。孔乙己が機俵を尻に泥まみれの手でいざつてあらわれるはずもないのに。それを眺める魯迅の寂寞たる心情、あれは「じゃくまく」と読んでこそぴたりだと合点したり、半ば上の空で

「これはいい」を連発、突き出しに出た小皿の煮豆をつまみ、ビールを飲み、酒を飲んだ。それ以後、友を伴い、月一回のペースで出向いている。Eさんの教えを守り、五時五分前には門扉の前に佇む。きつと特等席を占めたが、ただの一度も魯迅を話題にすることなく今日に至っている。北京の「居酒屋孔乙己」で黄君と再会、中国人の魯迅論を聞く日まで紹興酒（黄酒）を爛するが如くにここ東京の「居酒屋孔乙己」で我が身に魯迅を温めておきたい、そんな気持ちなのである。

（きぐち けんたろう・一九五六年卒）